

Music Fusion in Kyoto 音楽祭 奏プログラム実施メニュー【基本案】

* 内容は、事前打合せを行い各学校の状況に応じて変更を加えていきます。

■基本情報

ジャンル	音楽（音楽基礎）		
対象となる学年	小学校 1、2、3、4、5、6 支援学級		
対象となる科目（例）	音楽		
実施可能地域	府内全域		
実施回数	2～3回程度	1回の 所要時間	45分
実施可能人数	クラス単位（規模に応じて、クラス合同も可）		
実施団体 （個人の場合は 講師名）	団体名 加藤 晴子 代表者名 担当者名		
連絡先 所在地等	〒700-0985 岡山市北区厚生町2-18-3 TEL/ 086-234-5013（携帯080-6324-5013） FAX/ Email/ kurarasc@star.bbexcite.jp		
団体、講師の プロフィール	<p>愛知教育大学大学院教育学研究科修了，兵庫教育大学連合学校教育学研究科教科教育実践学専攻終了，博士（学校教育学）。くらしき作陽大学非常勤講師を経て，岐阜聖徳学園大学教授，令和2年3月定年退職。専門：音楽教育，声楽。名古屋二期会会員。</p> <p>現在，子どもたちの音楽活動の指導も行い，子どもの成長と音楽の関りの視点から指導法開発に実践的に取り組んでいる。歌と音楽教育を有機的に関連させた独自の視点から継続して進めてきた研究をベースに，歌の生成や表現について学際的な研究にも取り組んでいる。</p>		
実施可能な 時期（期間）	実施校と相談		

■実施内容

対象となる プログラム	体験
テーマ (タイトル)	身体を使って、のびのび音楽活動－楽しみながら音感覚やリズム感を育もう、歌声を磨き、歌唱の基礎を育もう－
趣旨・目標 ねらい	<p>長期間に渡ったコロナ禍によって、子どもたちの活動は種々の制約を受けた。音楽学習の有り方に生じた変化は、今日の活動にも何らかの影響を及ぼしている。このような状況下、改めて音楽の大切さが意識され、活動の機会や充実を求める声も多い。</p> <p>本プログラムではそのような経緯を踏まえ、音楽の基礎部分に焦点を当て、子どもたちがのびのびと活動できるような身体を使った活動を展開する。その上で、歌唱の基礎の育みに繋がるような活動も視野に入れている。音感覚やリズム感の基礎を中心に、ボディパーカッション、ボディワーク、アンサンブル等を行い、互いが自然に繋がらうような音楽体験を行うと共に、歌唱での発声や歌い方の基礎を育むことをねらいとする。このような活動は、音楽活動全般の基盤、土台作りの一環としても位置付けられる。</p>
全体計画 (案)	<p>音楽の特性に繋がる活動を起点に、音やリズムを中心に4つの対話「自分との対話」「他者（友だち）との対話」「音との対話」「作品や作曲者との対話」を段階的に体験し、音楽の基礎的な力の育みに繋げる。また、自分達のもっている声に目を向け、身体を動かしたり、曲を実際に歌ったりしながら歌声づくりを行い、歌い方の基礎を育む。</p> <p>【活動構成案】</p> <p>(1) 音やリズムに関して－4つの対話－</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「音との対話」1：【テーマ】身近にある物（例；紙）を使って色々な音を鳴らしてみよう。活動①：色々な音や出し方を見つけ、その面白さを感じる。活動②：音のリレーや即興のアンサンブルを体験する。 ・「音との対話」2：【テーマ】身体を楽器にして楽しもう。 活動① ボディパーカッション、簡単なアンサンブルをする。活動② 動きを加え、身体全体で表現する。 ・「音との対話」3：【テーマ】曲に合うリズムや動きを作ろう。（中学年・高学年） 活動：曲を聴いて様子や動きを思い浮かべ、そこから曲に合いそうなリズムや動きを作って表現する。 ・「作品や作曲者との対話」4：【テーマ】曲の思いを感じよう。オリジナル表現を作ろう。（高学年）活動① 打楽器アンサンブルやパフォーマンスを視聴する。活動② オリジナル作品作りに挑戦する。 <p>(2) 発声の基礎、歌い方に関して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「声と響きをアップしよう－身体と声－」発声のための身体の使い方を体験する。 ・「みんなならではの歌を表現しよう」作品を歌いながら、音の動きやリズム、歌詞との関りから子ども達ならではの歌唱を追求する（意図をもった歌唱表現）。

実施場所	体育館、音楽室等、平面で比較的広いスペースが取れるところ。
講師等	講師1人、スタッフ1人
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な備品、設備等 活動に応じて、ピアノ、CD、DVD等の音響設備機器を使用予定。 ・その他留意点 子どもたちがゆとりをもって動くことができるような広さ、平面の活動スペースが望ましい。